一絨毛膜二羊膜双胎一児死亡後の生存児に発症した先天性皮膚欠損症の一例

中島香苗[1)]　金子　栄[2)]

キーワード：先天性皮膚欠損症，一絨毛膜二羊膜双胎，双胎一児死亡

要　旨

一絨毛膜二羊膜双胎一児子宮内胎児死亡後に出生，皮膚欠損を認めた症例を経験した。在胎35週２日，2002g で出生，紙様児を伴っていた。側腹部に左右対称性に星状，鶏卵大の皮膚欠損を認めた。皮膚欠損部は，ドレッシング材，軟膏塗布でケアを行い，１ヵ月時には瘢痕治癒した。経過中，創部より MRSA を検出した。

一絨毛膜二羊膜双胎の一児子宮内胎児死亡の場合，稀ではあるが生存児に皮膚欠損症を呈することがあり注意を要する。また，皮膚欠損部の感染予防，ならびに監視が大切であると思われた。

緒　　言

先天性皮膚欠損症（aplasia cutis congenita）は，出生時に皮膚の一部が限局的に欠損している新生児外表奇形の中でも発生頻度の低いもので，１万出生に１～３人と報告されている[1)]。表皮，真皮，皮下組織，ときには筋・骨にまで達する欠損で，好発部位は被髪頭部であるが，全身のあらゆる部分に発症する。原因や欠損部位，その他の合併奇形の有無などにより９つの群に分類されている（表１）[2)]。今回，一絨毛膜二羊膜双胎一児死亡後に出生した，側腹部に左右対称性に皮膚欠損を認めた症例を経験した。皮膚欠損部は，ドレッシング材，軟膏塗布でケアを行い，１ヵ月時には瘢痕治癒した。経過中，創部より MRSA を検出したが，保存的治療のみで良好な経過をたどった。また，一絨毛膜性双胎一児死亡では神経学的後遺症を認めることも少なくないが，本症例では皮膚欠損以外の異常は認めなかった。文献的考察を加えて報告する。

症　　例

症例：日齢０，女児

母体既往歴：プロテインＳ低下，潜在性甲状腺機能低下症，子宮内膜異型増殖症（黄体ホルモン治療後）

Kanae NAKASHIMA et al.
1）益田赤十字病院小児科
2）益田赤十字病院皮膚科
連絡先：〒698-0036 益田市乙吉町イ103-1
益田赤十字病院　小児科